

中国の詩の翻訳について

百五

百六

後柏原院

後奈良院

母准三后藤子。贈左大臣教秀公女。号豊樂門院
皇女「比丘尼。大聖寺。諱覺チン。母同今上」

百七

正親町院—陽光院「諱誠仁」

百八

後陽成院

母新上東門院。贈左大臣晴秀公女。

皇女「大聖寺喝食。早世」

知仁親王「一品。式部卿。八條殿。
寛永六四七薨。母同。」

皇女「大聖寺。早世。十二歳。
母同後陽成」

注1、「祖形本『浜松中納言物語』の写し手は誰——『とりかへばや』

と『恋路ゆかしき大将』と」(池田利夫・『鶴見大学紀要』国語国
文学篇・38巻11号・二〇〇一年)

注2、「恋路ゆかしき大将物語」(小木喬『鎌倉時代物語の研究』所収・

東宝書房・昭和36年11月)

『恋路ゆかしき大将』末巻」(『物語文学論考』所収・教育出版

センター・昭和46年10月)

『恋路ゆかしき大将』考——付、桂宮本の欠落部分について」

(宮田光・『名古屋平安文学会報』6・昭和56年4月)

注3、「恋路ゆかしき大将」(『桂宮本叢書』第十六巻)・養徳社・昭和35年2月

(本学教授)

△余滴3V

中国の詩の翻訳について

漢詩和訳——たとえば白樂天の場合——

西村 富美子

今から二十五年ほど前に、かな書きによる白樂天の詩の訳詩集が、
武部利男氏により六興出版から出版されたことがあり(一九八一年一
月)、筆者はその書評を『中国文学報』に載せたことがあった。この
訳詩集には一二四篇の詩を収めるが、武部氏にはこれ以前に東京創元
社から出された訳詩集があり(一九五七年八月)、それには二篇の
詩を収める(仮に前者を新版、後者を旧版と呼ぶ)。旧版所収の詩は
すべて新版に収録されており、これらの詩の訳は、一、二篇を除いて
は、かつて雑誌『V I K I N G』に連載されたものを再編し一冊の書
として刊行したものである。旧版を出したとき、同人たちから「タケ
ベ譯スタイル」また「タケベサク」と評されたが、その後二十年ほど
は一篇の訳詩も発表していない。もともとは、原詩も無く、注も皆無
に近い、このひらがな譯の漢詩の訳詩は、同人たちの間でかなり物議
を醸したらしい。旧版以後二十年の沈黙は、漢詩の翻訳についての再
思考の時期であったようで、二篇ほどの文章にまとめられているが、
漢詩の翻訳についての理論的解明としては極めて早期に属するもので
ある。訳詩再開後も、訳詩の方法は依然として変わらず、百篇ほどを
追譯し、新版『白樂天詩集』としてまとめられた。

武部氏の著書の書評をしたのは、当時から白居易を研究対象の一つ
としていたからでもあるが、ひらがな訳という漢詩の翻訳方法に非常

に興味を惹かれたからであった。

中国の詩の翻訳、この問題はまことに難しい。これぞ窮極の翻訳方法、スタイル、というのは恐らく永遠に見出せないのではないだろうか。ただやはり、最近とみに漢詩離れの傾向が強くなっていく世の趨勢に対して、漢詩の理解者また愛好者のためにも、試行錯誤しつつも追求し続けなければならない、これもまた永遠の課題ではないかと考えている。

筆者もこの問題については考え続けてきているのだが、なかなか活路が見出せずにいる。長年にわたって、白居易の詩を毎月二首か三首訳す必要があり頭を悩ましているうちに、この問題について一つの試案をきっかけに再考の機会とし、中国の詩の翻訳方法に対する問題提起を試みたいと思う。ただしその対象は白居易の詩であり、最初に武部氏の訳詩集にふれたのもそれを意図してのことである。

さて漢詩の翻訳には、実作と翻訳論の両面がある。実作の面は主として小説・詩・和歌・随筆等の作家があり、たとえば森鷗外（『於母影』）、幸田露伴（『幽秘記』）、土岐善麿（『鶯の卵』『新訳杜甫詩選』）、佐藤春夫（『車塵集』『玉笛譜』）、井伏鱒二（『厄除け詩集』）、会津八一（『鹿鳴集』）等があり、一般の人でも相当数にのぼる。また専門家では鈴木虎雄をはじめ『国訳漢文大成』シリーズ等の訳業がある。翻訳論の面では、たとえば中野重治、青木正児、一戸務、吉川幸次郎、倉石武四郎、会津八一、土岐善麿、松枝茂夫、魚返善雄等がある。

最近では、種々の作家による詩の翻訳、また翻訳論はむしろ減少の傾向にあり、専門家による訳述のみが急増している。

さて白楽天を一つの例に、この翻訳の問題を述べてみたい。吉川幸次郎・桑原武夫共著『新唐詩選続編』（岩波新書）が出たのは今から五十年前の一九五四年のことだが、吉川幸次郎・三好達治共著『新唐詩選』（一九五二年）に続く唐詩の訳詩解説であり、専門書としてではなく一般読者を視野に入れた啓蒙書であったが、内容の斬新さと著

中国の詩の翻訳について

者の特異性により非常に好評を博したという。後者は、杜甫、李白、王維また「白頭を悲しむの翁に代わる」「春江花月の夜」等の詩の訓詁及び鑑賞を、前者は白居易、韓愈、杜甫の詩の訓詁、評論である。この『続編』に、白居易の詩が一六篇収めてあり、「長恨歌」「琵琶行」「新樂府」等の古詩、及び律詩・雜律詩が入っている。「長恨歌」「琵琶行」の二篇の選択は日本人に一番なじみの深い作品、「新樂府」三篇は白居易の代表作、ということが理由であろう。

この「長恨歌」に焦点をしばらく訳詩の問題に関する試論を述べる前に、この稿においては「長恨歌」の初めの八句を挙げて、訳詩の形式を、二、三の例を挙げ紹介しておきたいと思う。

白居易の主な訳注・訳文は資料として後に記しておいたが、その中で「長恨歌」の最も古い訳注・訳文は（二）であり、返り点つき原詩・書き下し文・注・訳文の典型的なスタイルである。以後もこのスタイルは長年踏襲されている。これに対して新しいスタイルの白詩の訳注が出たのが、（五）であった。

著者も、白詩の訳注で参考とすべきは、（一）には「長恨歌」は採られていないので、（二）、（三）のみであった、と述べているように、白詩の注釈書は皆無に近かった。最初に、二行もしくは四行で、翻訳調書き下し文があり①、次に訳文を兼ねた解説、のスタイルを通して、最後に原詩及び通常の書き下し文が付されている②。対象とする読者に配慮した形式であるが、以後この形式の翻訳は見られないように思う。

（吉川訳）……①翻訳調書き下し文・②最後に原詩及び書き下し文

長き恨の歌 ①

漢のくにの皇は 色を重んじて 國をも傾けなんひとを思い
宇を御らしめすこと 年を多て 求むれども 得ず
楊の家に女有りて始めて長と成る

中国の詩の翻訳について

養われて深閨に在りて人は未まだ識らず

天の生せる麗わしき質は自ずから棄つるに難く

一朝 選ばれて在り君王の側

眸を廻らして一たび笑えば百の媚かしさ生まれ

六宮の粉黛も顔色無し

漢皇重色思傾國 漢皇 色を重んじて 傾國を思う

御宇多年求不得 御宇 多年 求むれども 得ず

楊家有娘初長成 楊の家に女有りて 始めて長成す

養在深閨人未識 養われて深閨に在りて 人未まだ識らず

天生麗質難自棄 天の生せる麗質は 自ずから棄つるに難く

一朝選在君王側 一朝 選ばれて在り 君王の側

廻眸一笑百媚生 眸を廻らして一たび笑えば百の媚めかしさ生まれ

六宮粉黛無顔色 六宮の粉黛 顔色無し

そして、この二年ほど後から、次の武部氏訳が開始されている。(一九)

(武部訳) ……二句四行・七五調・かな書き。

ながい うらみの うた

カンの みかどは いろごのみ

すごい びじんを もとめてた

てんしに なってひさしいが

てんかに びじんは いなかった

〔注〕あり① 長恨歌

漢皇重色思傾國 御宇多年求不得

楊家有娘初長成 養在深閨人未識

天生麗質難自棄 一朝選在君王側

廻眸一笑百媚生 六宮粉黛無顔色

〔注〕あり② 一朝廷は唐の玄宗をさす。

じつは唐の玄宗をさす。

①カンの みかど (漢皇)

②ヨウの おうち (楊家)

(以下略)

このかながきの白詩の訳は、単に白居易の詩の訳というだけではな

く、翻訳全体の中で賛否両論の議論が噴出したが、訳者も限界を意識したこの訳詩スタイルは波紋を起こしたにとどまった。

次に、一句一行訳スタイルがあり、(一一)及び(一八)である。

次に挙げる(田中訳)は、原詩全文と書き下し文、脚注をまず挙げ、

次のような通訳を施す。

漢の皇帝は恋愛を重要にお考えになって傾国の美女をしたわれ

御代しろしめしてからが年お探しになったが得られなかった。

ところで楊家にむすめがいてやと一人前となったが

奥深い女べやにそだてられて世間の人は顔も見なかった。

生まれつきの美貌はしぜんと見すてられず

ある日のこと選び出されて皇帝のおそばにやってきた。

この女が目をうごかして笑うとたいへんな魅力が出てきて

六つの宮殿にお化粧をこらしている女たちはみな見おとりがした。

(一八)の(前野訳)は、一句一行の分節の訳詩があり、原詩は巻

末に付し、訳詩は文語調である。

次に挙げる(高木訳)のような、分節単位の前詩、書き下し文、注、

その後二句単位の訳詩を施した形式がある。(二二)など

漢の国の皇帝は女の美しさを重視して、一ながめすれば国を傾

けるようなすごい美人はいないものかと思慕をつのらせたが、そう

した美人は、皇帝が天子の地位についてから多くの年を経たけれど

も、さがしあてられなかった。

ところが、楊家に一人の娘があつて、やと大人になったばかり。

奥深い女部屋で育てられているので、誰もまだ気付かない。

しかし、天のつくりなした麗しい姿は、自身としてもすてがた

いほどの美人。

この美しい娘が、ある日ふいに選択されて、天子のお側にまかり

出ることになった。

謁見の日、彼女が眸をめぐらしてほほえむと、さまざまの媚か

しさがあふれ、粉や黛で化粧をこらした六棟の後宮の美人たちも、顔色の美しさはなく、月の前の螢火同様。

訳詩の問題を論ずるに先だって、「長恨歌」を選んだのは、訳詩の素材として適当ではないか、というのが主な理由である。韻律の拘束が比較的緩やか、物語的な詩、平易な散文訳の可能性が高いこと、等の有利な要素を持ち合わせている。「長恨歌」ならば、各人各様の翻訳が生まれるのではないか、との私見を次稿で論じたいと思う。

「白居易詩の主な注訳」

一、鈴木虎雄：『白楽天詩解』 弘文堂 一九二七年

(一九二六年八月：京大夏期講演会講義)

二、佐久 節：『白楽天詩集白楽天詩後集四卷』国民文庫刊行会

(統国訳漢文大成・文学部・第九卷)

一九二八年、三〇年

三、簡野道明：『白詩新釈』 明治書院 一九三三年

四、阿部吉雄：『漢詩』 学燈社 一九五二年

五、吉川幸次郎・桑原武夫：『新唐詩選統編』岩波新書 一九五四年

六、片山 哲：『大衆詩人 白楽天』岩波新書 一九五六年

七、高木正一：『白居易 上・下』岩波書店 一九五八年

八、片山 哲：『白楽天』 社会思想社 一九六〇年

九、魚返善雄：『白楽天詩集』 平凡社 一九六〇年

一〇、倉石武四郎他：『歴代詩選』平凡社 一九六〇年

一一、田中克己：『白楽天』(漢詩大系二二) 集英社 一九六四年

一二、森 亮：『白居易詩鈔』(東洋文庫五二) 平凡社 一九六五年

一三、田中克己：『白楽天』(中国詩人選四) 集英社 一九六六年

一四、塩谷 温：『唐詩三百首』 書籍文物流通会 一九六八年

一五、内田泉之助：『白氏文集』 明德出版 一九六八年

一六、松浦友久：『中国詩選』三 社会思想社 一九七二年

中国の詩の翻訳について

一七、山本太郎：『白楽天詩集』 角川書店 一九七三年

一八、前野直彬：『唐代詩集下』 平凡社 一九八〇年

一九、武部利男：『白楽天詩集』 六興出版 一九八二年

二〇、松枝茂夫：『中国名詩選下』岩波書店 一九八六年

二一、西村富美子：『白楽天鑑賞中国の古典』角川書店 一九八八年

二二、岡村 繁：『白氏文集』三、四、六 明治書院 一九八八年

二三、入谷仙介：『唐詩の世界』 筑摩書房 一九九〇年

二四、松下忠久：『白楽天一〇〇選』NHK出版 二〇〇一年

付「漢詩・漢文の翻訳に関する主な論文」

◎中野重治：『漢詩・漢文の翻訳』 全集第八巻所収・筑摩書房 一九三七年二月

◎吉川幸次郎：『支那詩の文化と芸術』 全集第一七巻所収 一九三八年九月

◎吉川幸次郎：『支那詩の文化』 全集第一七巻所収 一九三八年九月二四日、二五日、二八日

◎戸 務：『漢詩について(現代支那の文化と芸術)』 松山房 一九三九年一月

◎吉川幸次郎：『唐詩の翻訳』 全集第一七巻所収 一九四〇年二月一八日

◎吉川幸次郎：『竹内好氏への書簡』 全集第一七巻所収 一九四一年五月

◎吉川幸次郎：『漢詩の論理』 全集第一七巻所収 一九四一年九月、十一月、十二月

◎会津八一：『漢詩小見』 全集第六巻・中央公論社 一九四二年三月

◎会津八一：『漢詩』 全集第六巻・中央公論社 一九四二年四月

◎吉川幸次郎・大山定一：『洛中書簡』 全集第一九巻 一九四四年三月、四月

◎ウサミ・ナオキ：『中国古詩の翻訳』 図書新聞 一九五七年一月七日、一四日

◎山形 直：『唐詩の翻訳』 大正七月号 一九五八年七月

◎吉川幸次郎：『唐詩の翻訳』について山形直氏に 全集第一七巻 一九五八年九月

◎武部利男：『漢詩の翻訳』について感想 無限・八号 一九六一年九月

◎蒲池欽一：『佐藤春夫と中国詩』 国文学 一九六一年一月

◎松枝茂夫：『漢詩の翻訳』について 言語生活 一九六二年六月

◎佐藤保：『中国詩の翻訳』 漢文教室一〇五・六・八号 一九七三年、五、二月

◎武部利男：『漢詩の翻訳』のおぼえがき 文学(翻訳II) 一九八〇年二月

◎木村哲也：『漢詩和訳書』 北海道教育大学紀要 四九・二 一九九二年三月

◎木村哲也：『漢詩和訳書』 語学文学・三七号 一九九二年三月

◎木村哲也：『漢詩和訳書』 人文研究・六七号 一九九二年三月

(本学教授)